
今日も少年は墓を掘る

反対ノ反対

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日も少年は墓を掘る

【Nコード】

N1820K

【作者名】

反対ノ反対

【あらすじ】

舞台は中世末期のヨーロッパ。

町で疫病が蔓延する中、その町に住むとある少年は、墓守の役目を命じられていた。

町が腐敗に満ちていく中、少年は今日も墓穴を掘り続ける。

ブローグ

ザッザッザ。

汚水のように濁り淀んだ空の下、ふと金属が砂利をこするような音が聞こえてくる。

ザッザッザ。

どこからか繰り返しそんな音が聞こえてくる。

ザッザッザ。

見れば、たくさんの墓が立ち並ぶところに少年がいた。

年の頃はおそらく十代の半ば、黒い髪に小柄な体躯、白いシャツは土に塗れてくすんでいる。

少年は一通り掘り終えたのか、手元のスコップを投げ出し、身体を一杯に伸ばした。そこには人独り分は収まるであろう穴が開いている。

少年は、一呼吸置いて、そばに横たわる動かなくなった人間へと視線を移す。

その肥えた人間の露出した肌には紫色の斑点が浮かんでおり、虚ろな目を向けたまま、口をだらしく開けて横になっっている。

少年は多めに息を吸って口を固く閉じ、その横たわる人間の脇に立ったかと思うと、ごろごろとその人間を転がし始めた。

鉛筆のように転がされている人間は、何も考えていないかのように何の反応も見せないまま、ただ泥に塗れていくだけであった。

どさり、と音を立てて、その人間は先ほど少年が掘った穴の中へと収まり、そこへ少年は容赦なく土をかぶせていく。そのさなか、濁った眼玉が少年を恨めしく見ているようだったが、少年は黙々と作業に勤しみ、かぶせた土をスコップで叩いては固めていった……。

一仕事終えた少年は、ようやく空を仰ぎ見る。

そこは依然として、光の欠片も差し込まない、暗く淀んだ雲が漂うだけだった。

作業工程 1

朝方、少年は寝台から起き上ると、食卓へと向かい、パンと水で朝食を済ましてから家を出る。

その後、少年が家から出てきても、優しく笑いかける隣人もいなければ、通行人もそこには見当たらない。寂れた住居の合間合間を風が吹き抜けて行くだけである。

少年は左右を眺めてから、空を見上げ、そしてそれから石畳の道を一步と踏み出していった。

やがて、人影が見えるところまでやってきた少年は、真っ直ぐと見据えていた視線を地面へと落とし始める。

周囲の人影は少年が来ると同時にそそくさと家の中へと消えていき、数名の婦女たちが、口汚く少年のことを囁き合っている。

「やあね〜」「まだ生きてるの〜」「本当に迷惑だわ」

少年はそんな罵詈雑言を気にもとめず、ただ前を向いて歩いていた。

そんな中、少年の前に三人組みの子供が飛び込んできたので、少年は立ち止まった。

その子供たちはなぜだか鼻を押さえながら仲間の子供たちに話しかける。

「おいおい、ここなんかくせーぞ」

「ホントだくせー。なんだか腐った臭いがぶんぶんする」

「なんでこんな臭いが……ん？ あっ、ボルネオだ！」

真ん中にいる子供が力強く、ボルネオと呼ばれる少年に指を指した。

残りの子供たちもわざとらしく、今気づいたように飛び跳ねて、ボルネオを指差した。

「墓守のボルネオだ！ どうりで腐った臭いがしたわけだ」

そこで子供たちは、ぴょんぴょん跳ねながら口々に言う。

「やーい、やーい、墓場のボルネオ、墓場のボルネオ」

「そこ掘れ、そこ掘れ、墓を掘れ」

「死体は食べるな、泥を食え」

ボルネオはそんな子供たちを無視して、その脇を通り過ぎて行く。すると、子供たちは「きしし」を笑みを浮かべ合いながら、ボルネオの背中を淀んだ眼で見つめていた。

ボルネオが向かっていた先というのは教会だった。

教会は訪れる者すべてに重みを加えるかのように荘厳としており、また、そびえる尖塔が目についた。

ボルネオは正面の扉からは入らず、裏口の方へと回って行った。

すると、そこには白地に多少の色合いの施された寛衣を身にまとう、司祭と思しき男がいた。髪が肩にかかるぐらいで、表情はどこか厳めしいところがある。

司祭は、腕を組み、口を尖らせながら言う。

「今日は、昨日より十人も増えた。いつものようにやってくれ」

そう言つて司祭は裏口の扉へと姿を消そうとした間際、ボルネオは司祭へ向けて言葉を発した。

「サンスティ司祭、そろそろ墓石が尽きそうですので、証書の方をいただけないでしょうか」

すると、サンスティ司祭は顔をしかめて言う。

「もうか……。死体を運び終わったらまた来い。その時に渡してやる」

サンスティ司祭は言うつと扉の中へと入って行った。

その後、ボルネオは教会の真裏に回り、そこにうず高く積み重なった死体の山へと視線を注いだ。

死体はどれも紫の斑点が浮かんでおり、ボルネオは「はあ」と小さく溜息を洩らさずにはいられなかった。

そして、死体を上から順に、そばに置いてある荷車に載せていき、

一杯になると布をかぶせて、荷車を引いて行つた。

ボルネオは死体をすべて運び終えると、サンスティ司祭からの証書を受け取り、今度は石細工の職人のものへと訪れた。

その職人はボルネオを認めると、「うつ」と頬の筋肉を引きつらせながらもその場からたじろぐことなく胸を張って構えていた。

「墓守の、なんか用でもあんのか？」

ボルネオはゆっくりと顔を持ちあげ、

「墓石が不足してるんです。用意してくれませんか？　ここに証書もあります」

ボルネオはそう言つて、懷から証書を取り出し、差し出した。

職人はその証書に軽く目を通し、そしてすぐさま乱雑にポケットの中へと詰め込んだ。

「わかった。けど、生憎と俺たちはかなり忙しんだ。運ぶとなると明日以降になるがいいか？」

それを聞いたボルネオは慌てた様子で、

「いけません！　それは困ります。埋葬したとして、墓石がないのなら幅取りに支障がでます。万が一、効率の問題で死体の放置時間が延びるのならば、疫病がさらに深刻になってしまいます」

そこで職人は「ちっ」と舌打ちし、軽く溜息を吐いた後に、

「あーだったら自分で持つていつてくれよ。何度も言うが暇じゃねーんだ。疫病のおかげで人手不足。その原因が誰なのか、おまえが一番よくわかつてると思うがな。まあ奴隷の一人ぐらいなら貸してやるよ。って言うても一人しか余ってないんだがな」

「それじゃあ頼みます……」

「おう。　　おい、奴隷！　こっちこーい！」

職人が声を上げて呼び立てると、奥の方からひよっこりと、茶色い髪を棚引かせた黒い瞳の少女が顔を出した。

「はい」

そう返事して近づいてきた少女は凜とした顔立ちで、年の頃はおそらくボルネオとそれほど変わりはないだろう。このぐらいの顔立ちで若い奴隷は、だいたいが上流階級の者がはべらせているのだが、しかし全体を見れば、肌は浅黒く、肌荒れが目立ち、少し痩せていた。

それを見たボルネオは何かの冗談のではといった具合に、訝しんだ表情を維持し続けていた。

しかし、職人はボルネオのそんな訴えに気づいている風でもなく、奴隷の少女にボルネオを手伝うように告げてから、「じゃあな」と一言残して、奥の間へと姿を消していった。

二人きりになり、ボルネオが先ほどからの疑問を口にした。

「えっと……君はちゃんと手伝えるのかい？」

「うん」

「……そっか。じゃあ墓石の置いてある所へ案内してもらおうか」

そう言つと、少女は素っ気なく、

「あっち」

と指差し、そちらに向かって歩き出した。

作業工程 2

ボルネオが少女の跡を追っていると、採石場が見えてきた。

採石場は高く厳然とした岩壁がそびえ、そこにいる人々の前に立ちはだかつているようだが、実際のところは職人たちの手によって削られ続けた姿である。

そこには数多くの職人たちがあくせくと岩壁を杭で打ち付けたり、取り出した石材を運び出したりと汗水をたらしていた。

また、墓石の材料と思われる細長い石材がピラミッド状に積み重ねられているの目についた。

ボルネオはあらゆる石材で雑多とする中、一番慣れ親しんだであろう墓石がすぐ目にとまったようで、ずっとそのピラミッド状に積み重ねた石材の群れを眺めている。

少女は少女でその方へと歩いていくと、職人たちは少女に気づき、訝しんだ表情をとる。けれど、それも一瞬のことで、少女の後ろを歩く人物を見るなり、顔を曇らす者から、眉を上げる者、顔を歪ませる者と様々であったが、どれも不快の表情には変わりなかった。

少女はそれに気付いたのか、後ろを振り返ると、そこには周囲の視線を締め出すように下を向きながら歩くボルネオの姿があった。

「ふう」

少女は微かな溜息を漏らし、石材の置かれている場所まで足を運ぶとそこで立ち止まる。

「これ」

少女の指の先にあるのは、やはりピラミッド状に積み重ねた墓石の山だった。

少年は、下から上へと墓石の山を見上げては、また下から上へと見上げることを繰り返した。

「これをどうやって運ぶんだい？」

ボルネオの問いかけに対し、少女はいたって簡素に、

「その荷車」

そして、ボルネオは、朝方の死体の積み下ろしが墓石に変わり、いくらか救われたように、表情に微かながら、緩んだようにも見えた。

少女は見た目に似合わず力があるようで、荷車に墓石を載せるのはボルネオよりも手際がよかった。

途中途中、ボルネオが少女に、

「重くないのかい？ 両脇に抱え込んで大丈夫なのかい？」

と言葉をかけたが、少女は無表情のまま、

「へいき」

とそれだけ答える。

墓石を荷車で墓地へと運ぶ時なんかも、少女が荷車を引いていき、ボルネオが後ろから後押ししていた。

その最中でもボルネオは少女に言葉をかけたが、やはり同じ返事しか返ってこなかった。

しかし、荷車で墓地と採石場を行き来する中で、少女は一言、

「あなたがボルネオ……」

と小さく呟いたが、これにボルネオは気付いたのか気付かなかったのか、わずかに顔を上げるだけだった。

夕日が辺りを赤く染め上げる頃には、ボルネオと少女は、墓地に足りなくなった分の墓石をすべて運び終えていた。

墓地は相変わらず薄気味悪く、墓標が延々と一帯を覆い尽くし、まるで土は、墓に埋まった死人から養分を摂っているのか、やけに黒々としており、木々はどれも歪な形で葉の一枚も生えてはいなかった。

そんなところで、ボルネオと少女は背を一杯に伸ばし、二人、積

み上げた墓石の上へと腰をかける。

二人はただぼーっと正面に並ぶ墓の群れを眺めていた。が、それもつかの間の休息で、ボルネオはすぐさま仕事に移りかかるうと、その場から立ち上がる。

そんなボルネオに少女が目細めながら、

「まだやるの？」

墓を見据えていたボルネオは少女へと視線を移し、口を開く。

「そうだね。これからが本番だからね」

そう短く言うと、ボルネオはまた墓の方へと視線を戻し、歩き始める。

それを少女はただただぼーっと眺めていた。

もう辺りが暗闇に包まれた頃、それでもボルネオは仕事を続けていた。少女もなぜだか、まだそこにいる。

「まだ帰らないのかい？」

ボルネオが不審がつて尋ねると、少女は荷車の上で足をばたつかせながら、

「あなたのせい」

と、ボルネオに突き刺すような一言を浴びせた。

それを聞いたボルネオは肩を小さくびくつかせて、伺うように再び尋ねた。

「何が？」

少女は虚ろな表情で空を見上げながら、

「主が言ってた。あなたと墓地へ行くなら家には戻ってくんな。なんでも病原菌がうつるから。だから、もうあたしは捨てられた」

かと言って、少女の顔には悲しみも怒りも表れてはいなかった。

ただ、どうでもいいとばかりに気だるそうな顔を作っているだけだ。それを聞いたボルネオは、やや視線を下げて、

「ああ、そういうことか。それは悪いことをしたね。ごめん」

そんなボルネオの言動に少女は目を見開いてボルネオの方を凝視した。

「謝ったの？」

ボルネオは軽く頷く。

「私奴隷よ。あなたに対して敬語を使ってないし、嫌味だって言ったのに……」

「奴隷？ どうだっていいよ、そんなこと」

ボルネオはひどく投げやりな調子で、そう答えた。

「変わってる」

少女がそう言うのと、またスコップが土を掘り起こす、じやりじやりとした音が響き始めた。

けれどその音も、しばらくすると少女がまた口を開くことで、妨げられる。

「なんでこんな仕事をやっているの？」

ボルネオはスコップを動かしながら、

「生きるため」

と短く答える。

「生きるのにしては危険すぎるよ？」

「まあ確かに、僕がいつ、この死体の群れから疫病をもらうともわからない……だけど、僕にはこれしかない。そう言う君は、なんでここにいるの？ 居場所がなくなったことは聞いたけど、なにも、こんな危険なところになくても良いんじゃないのかい？」

少女は依然として、荷車の上で足をばたつかせて言った。

「私は、どうだっていいの」

「そうか」

ボルネオは首を傾げながらもそう答えた。

それから一通り作業を終えた少年がスコップを地面に突き刺し、溜息を一つ漏らすと、ふいに尋ねた。

「名前、教えてくれないか？」

少女はどうしたわけかいったん俯き、しばらく考えるようにして、

答えた。

「ブロンテ」

ボルネオはわずかに口元を緩ませて、

「ブロンテ、家を追い出されたのなら、僕の家に来てくれよ」

告げられたブロンテは、目を一瞬大きく見開いたが、途端に難しい顔を作っておもむろに答えた。

「しかたない」

些細な変化

ボルネオの朝はいつもと違った。

ボルネオ以外に誰もいなかったはずの家には少女が一人おり、その少女はボルネオとは別の部屋で小さな寢息を立てていた。

やがて日は昇り、空はまだ白々としているが、窓から微かな光が差し込んでくる。

少女はその光に目を歪めながら、ゆっくりと身体を起こす。

その土色に染まった髪少女、ブロンテは、かけ布団から這い出て、途端に慌てた足取りで部屋を出て行った。

ブロンテが向かった先は台所だった。

彼女はそのまま朝食のしたくをしようと、食料の入った櫃に手を伸ばす。が、その途中で彼女の手は止まり、ピクリとも動かない。

「あ、そうか。ここは彼の家」

そう呟くと、ブロンテは先ほどまで寢床にいていた部屋へと引き返して行った。

「おい、ブロンテ？」

ボルネオの呼びかける声に、再び目を覚ましたブロンテは台所の方へとやってきた。

「おいブロンテ。朝食の支度はしてないの？」

ブロンテは瞼を半ば開けながら、あくびを一つして、気だるそうに答えた。

「してない」

さも当然のようなブロンテの態度に、ボルネオはやや困惑気味に半ば眠気の漂う瞼をしばたかせる。

「そうか、朝食のことを忘れてたんだね」

ボルネオは一人得心がいったとばかりのことを言ったが、実際の

ところ彼女の返答は、

「忘れてた？ 私がなんで朝食の支度のことなんかを考えなきゃいけないの？」

「なんでって、君は仕事をするのが当然だろ？」

そこでブロンテは一つ小さな溜息を漏らし、真っ直ぐな瞳でこう答える。

「あなたは私の主じゃないわ」

これを聞いたボルネオは面食らったとばかりに口と目を開け、数秒と固まっていた。

「あなたは言った。僕の家に来てくれよ、と。だから私はもう奴隷じゃないの」

この少女の言動は奴隷としてはあるまじきもので、まして奴隷が平民の振舞いをするのはもってのほかであった。

しかし、ボルネオは、言葉に詰まってなかなか反論できない様子である。

「だ、だけど、君は僕の家泊っているんだよ？ 家事ぐらいはやってほしい」

ボルネオが彼女から視線を逸らし、ぼやくように言うと、彼女もボルネオから目を逸らして言った。

「そう、あなたも私を捨てるの。生きるなと言うのね。わかった」
ボルネオは手前で大きく手を振り、大層慌てた様子で、

「違う違う。そこまでは言っていないよ」

「そうなの？ じゃあここにしていることにする」

ボルネオは慌ただしくなった心臓を沈めるように、ゆっくりと息を吐いた。

「あ、でも」

そこでブロンテは付け足すように言った。

「墓掘りぐらいは手伝う」

それを聞いたボルネオは何とも言えない複雑な顔をした。

今日はやはり、ブロンテがいることも含めてボルネオとっては違った日であった。

というのも、ボルネオがいつものように教会へと赴き、そこで死体を預かり、墓場まで運んでいくと、その寂れた墓地には人影がなかったからだ。

ボルネオたちが近づくにつれ、その人影の像がはつきりと墓地の中から浮き出ていくの、ボルネオは驚きと怪しみを交えた表情で伺っていた。

その人影の正体は老人であり、片手に杖を携えながら、そこら中に広がる墓の群れを眺めている。

ボルネオはその老人に特に声をかけるでもなく、ちらりと見た後には、自分の作業へととりかかろうとしていた。

しかし、老人は少年の姿を目に捉えるなり、訊かずにはおられなかったようで、少年をじっと見つめた後に口を開いた。

「なあ、その少年。ちと、訊きたいことがある」

そのしわがれた声は、墓場の空気と同調するように、少年の耳下へとゆっくりと流れてきた。

「なんですか？」

ボルネオは存外冷たそうに、老人に対し背を向けたまま答えた。

「わしの妻の墓はどれかの？」

そこでボルネオが振り向いた時に目にした老人の顔は皺だらけでもう少しで眠りにつきそうなぐらいに目が細かった。

「残念ながら、それはわかりません」

ボルネオは突き放すようにそう告げて、再び作業へと取り組もうとする。

「本当に覚えてないのか？ 昨日あたりだと思っんじやが、何せ死んだのは一昨日だからの。その間にわしと同じぐらいに年をとった女性を埋めた覚えは本当じゃないのか？ よく思い出してくれ」

懇願するように老人の姿に、ボルネオはただ首を横に振るだけで

あつた。

「残念ながら思い出すことができません。僕は毎日、何十人という死体を土に埋めていますから」

「そうか」

と、老人は力なく答えた。

「……でも、あなたはここに来るといことは、その人をととても大切になさっていたんですね」

「当たり前じゃ、わしらはいつも互いに支え合ってきた。疫病なんて関係ない！ わしは何としても墓標に妻の名を刻みたいのじゃ」

老人は掠れがすれ力の入った声と共に、杖を握る手にも力を込めた。

「なあ少年。思い出せないのなら墓を掘り返すということはできないのか？」

この質問にボルネオは、目をきつと見据え、口元を固くして言った。

「なりません！ 墓を掘り起こすということは死者に対する冒瀆です」

それを聞いた老人は、途端に溜息を吐き、諦めきれずといった面持ちでその場に立ちつくしていた。

そして、ボルネオとブロンテは墓掘りに勤しみ、死体をどんどん埋めていった。

ボルネオたちが再び顔を上げる頃には、もう辺りは夕焼けが支配し、一人の疫病に侵された老人が、黒々とした土の上に横たわっていた。

「やはりか……」

少年が一人呟くと、隣にいた少女がそれを尋ねた。

「妻がここに埋められたのは、疫病だったからだろう。僕はここ最近じゃ疫病に感染した死体しか埋めていない。妻が疫病に感染したのなら、その夫も感染してる可能性が大きいということさ。それに、ここは空気が悪いしね。何よりここに人が来ることは珍しい」

少年と少女は、その新たに加わった死体を埋めるため、再び墓穴を掘り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1820k/>

今日も少年は墓を掘る

2010年10月9日20時47分発行